

受賞者紹介

◇会長大賞

「位置依存型通信サービスの総合的研究」

瀬崎 薫 (東京大学)

業績:

位置依存型通信サービスは、いまや現代社会に不可欠な生活基盤である。受賞者は、この分野が萌芽期にあった 2000 年代初頭から研究を先導し、75 編以上の学術論文、200 編を超える国際会議論文を発表するなど、国際的に卓越した成果を継続的に挙げてきた。また、JST 科学技術振興調整費「電子タグを利用した測位と安全・安心の確保」をはじめとする大型研究プロジェクトを牽引し、この分野の発展に極めて大きな貢献を果たしてきた。代表的成果の一つである、GPS が利用できない環境で、センサ・電子タグ・近距離無線通信を利用して位置を推定する手法の研究は、情報通信分野を代表する国際会議である IEEE PIMRC で Best Paper Award を受賞するなど極めて高く評価されると共に、コロナ禍において人流密度の推定や接触確認アプリへと応用され、全国の大学で広く導入されるとともに、世界中のメディアから大きな注目を集めた。加えて、受賞者は豊富な学術的知見を背景に、文部科学省共同利用・共同研究拠点である東京大学空間情報科学研究センター長として、日本全体の位置情報利用研究を主導し、研究コミュニティの発展を支えてきた。さらに、ISO 地理情報標準の国際委員・国内委員として、研究成果の社会還元である標準化の整備にも多大な貢献を継続的に行ってきた。

瀬崎 薫 (せざき かおる)

東京大学 空間情報科学研究センター 教授
(プロフィール)

- 1984年 東京大学 工学部 電気工学科卒業
- 1989年 東京大学 大学院工学系研究科
電気工学専攻 博士課程修了 工学博士
東京大学 生産技術研究所 講師
- 1992年 東京大学 生産技術研究所 助教授
- 1996年 カリフォルニア大学 サンディエゴ校 客員研究員
- 2001年 東京大学 空間情報科学研究センター 助教授
特許庁 工業所有権審議会 臨時委員
総務省 電気通信事業紛争処理委員会 特別委員
- 2002年 ISO/TC211 (地理情報標準) WG8 エキスパート
- 2003年 IEEE Tokyo Section Treasurer
- 2007年 東京大学 空間情報科学研究センター 准教授
- 2009年 IEEE PIMRC Best Paper Award
- 2010年 IEEE ICEEE Best Paper Award
- 2011年 現職、東京大学 生産技術研究所 教授兼任
- 2017年 IEEE COMSOC e-Health TC Career Achievement Award
- 2018年 東京大学 空間情報科学研究センター センター長
- 2022年 地理情報標準資格認定委員会 委員長 (現在に至る)



◇会長大賞

「情報セキュリティ創成期からの先進研究と IT 社会への貢献」

寶木 和夫（株式会社ハイセーフ）

業績：

情報社会の安全かつ健全な発展のために、暗号と情報セキュリティの技術は重要な研究分野となっている。受賞者は、その産業の創生期(1980 年代前半)から暗号及び情報セキュリティ技術に関する研究に着手し、日立製作所・産業技術総合研究所・ハイセーフ時代を通じて、著書 7 件、査読付き論文 44 件、国家プロジェクト研究報告 1 件の発表や外国特許 63 件を含む関連特許を多数取得する等の研究成果を上げた。また、研究成果の実用化として、共通鍵暗号として先行開発した MULTI2 暗号はデジタル衛星放送向けの郵政省電技審標準暗号として採用され、国内全てのデジタルテレビ内に存在するデジタル衛星放送システムに組み込まれ、衛星放送の安全確保に貢献した。さらに、公開鍵暗号の実装研究としてデジタル署名を高速化し生成する IC カードの製品化や、ブロックチェーンを改良した方式での履歴交差実現を世界に先駆けて実施した。標準化活動も積極的に行い、ISO 国際標準化組織の日本メンバーと協力して ISO への提案活動を行い、CLEFIA、Enocoro 等の標準化に成功した。国家プロジェクトでは研究開発責任者として、自然言語処理 LDA(Latent Dirichlet Allocation) を用いたカーハッキングに関する脆弱性を評価するとともに対処策の可視化に成功した。

寶木 和夫（たからぎ かずお）

株式会社ハイセーフ 代表取締役

〈プロフィール〉

- 1977年 東京工業大学 大学院修士課程修了
株式会社日立製作所 入社
- 1986年 東京大学 工学部 工学博士
- 1998年 電気学会 著作賞
- 2002年 発明協会 関東地方発明表彰 発明奨励賞
情報処理学会 論文賞
- 2003年 ISO/IEC SC27 (セキュリティ) 国内委員会 委員長
- 2004年 株式会社日立製作所 主管研究長
- 2007年 フライブルク大学・ダルムシュタット工科大学 客員教授
情報処理学会 標準化貢献賞
- 2009年 電子情報通信学会 情報セキュリティ専門委員会 委員長
- 2010年 経済産業省 工業標準化事業貢献者表彰
電子情報通信学会 基礎・境界ソサイエティ 功労賞
- 2011年 日本学術会議 連携会員、情報処理学会 標準化功績賞
- 2012年 産業技術総合研究所 セキュアシステム研究部門 副部門長
- 2018年 CYBER 2018 Best Paper Award
- 2019年 現職
- 2023年 国際商事研究学会 会長



◇会長賞

「セキュリティ・プライバシー脅威の先駆的研究と社会制度・倫理整備への波及的貢献」

秋山 満昭 (NTT 株式会社)

業績:

急速に進展する情報技術の安心・安全な活用には、新たに出現するセキュリティ・プライバシー脅威に対して、技術・制度・倫理を含む総合的な対策が重要である。受賞者は、総務省主導のプロジェクトで開発した Web 経由のサイバー攻撃観測技術を用いて主要 ISP と連携した大規模な実証実験を主導し、悪性サイト対策の有効性を示した。これにより「通信の秘密に関するガイドライン」における”有効な同意”の考え方が明確になり、今日のアクティブディフェンスにつながる制度的基盤の整備に貢献した。また、攻撃者に先んじて未知の脅威を発見・対処する「オフENSIVEセキュリティ」や人間の認知に関わる脅威を扱う「コグニティブセキュリティ」等の新たな視点の研究領域創出においても、独自のアプローチを多数提案した。その中でも今日のインターネットを支える各種 Web サービスに対する未知の脅威の評価・検出及び対策に関する研究成果は、主要ブラウザや基幹的サービスに採用され、世界中のユーザの安心安全に貢献した。さらに、NDSS(Network and Distributed System Security)における日本人初のプログラム委員や他のトップ会議のプログラム委員を歴任し、国際的な研究評価基準の形成を通じて革新的かつ高品質な研究の推進と国際的なセキュリティ研究コミュニティの健全な発展に貢献するとともに、近年はサイバー脅威に関する倫理的研究プロセスのコンセンサス醸成を産学官横断で主導している。

秋山 満昭 (あきやま みつあき)

NTT 株式会社 サービスイノベーション総合研究所
社会情報研究所 上席特別研究員
(プロフィール)

2007年 奈良先端科学技術大学院大学 情報科学研究科
修士課程修了

日本電信電話株式会社 (現 NTT 株式会社) 入社

2013年 奈良先端科学技術大学院大学 情報科学研究科
博士課程修了 博士 (工学)

2015年 日本電信電話株式会社 セキュアプラットフォーム研究所 研究主任
情報処理学会 学会活動貢献賞

2016年 日本電信電話株式会社 セキュアプラットフォーム研究所 特別研究員

2019年 日本電信電話株式会社 セキュアプラットフォーム研究所 上席特別研究員

2020年 サイバーセキュリティに関する総務大臣奨励賞

2021年 現職

2022年 IPSJ/IEEE-Computer Society Young Computer Researcher Award

2025年 NDSS 2025 Distinguished Reviewer Award



◇会長賞

「異業種間の安全なデータ連携を実現する「秘匿クロス統計技術」の開発と
社会課題への応用」

野澤 一真¹、長谷川 慶太²、寺田 雅之¹

(1: 株式会社 NTT ドコモ、2: NTT 株式会社)

業績:

データに基づく意思決定が社会のあらゆる場面で浸透し、企業や組織が保有するデータは社会課題の解決に不可欠な要素となっている。しかし、単独の組織が保有するデータだけでは解決できる課題に限りがあり、組織の壁を越えたデータ活用が求められていたが、プライバシー保護の観点からその実現が難しかった。受賞者はこの根本的な課題を解決するため、互いに自らのデータを相手に開示することなくプライバシーが保護された安全な統計情報を作成する「秘匿クロス統計技術」を開発した。本技術は、データを暗号化したまま計算する「準同型暗号」、CPU 内の保護領域で処理を行う「隔離実行環境」、そして統計情報から個人を特定できないよう保証する「差分プライバシー」という3つの先進技術を効果的に組み合わせている。これにより、世界でも高いレベルの安全性と日本の法制度への適合性を両立させ、国内で初めて社会実装された安全な異業種間データ連携技術を実現した。また、本技術の共同実証の代表例として、航空機の定時出発率向上という課題に取り組み、航空会社の国内航空券の予約データの搭乗に関する情報と通信事業者の人流データを安全に連携させ、航空機搭乗前のお客様の移動状況に関する統計情報を作成し、活用した。その結果、お客様が搭乗に至るまでにどこで時間を要しているかを明らかにし、この知見をもとに空港内での案内などの支援を実施した結果、スムーズな移動につながり、顧客体験価値向上と社会課題解決に寄与した。

野澤 一真 (のざわ かずま)

株式会社 NTT ドコモ モバイルイノベーションテック部

社会予測技術開発担当 主査

〈プロフィール〉

2020年 法政大学 大学院理工学研究科 修士課程修了

株式会社 NTT ドコモ 入社

2024年 情報処理学会 コンピュータセキュリティ研究会

運営委員 (現在に至る)

情報処理学会 マルチメディア、分散、協調と

モバイル (DICOMO2025) シンポジウム 実行委員 (現在に至る)

2025年 情報処理学会 業績賞

情報処理学会 コンピュータセキュリティシンポジウム 2025

実行委員 (現在に至る)

現職



長谷川 慶太 (はせがわ けいた)

NTT 株式会社 サービスイノベーション総合研究所
社会情報研究所 主任研究員
(プロフィール)

2015年 慶應義塾大学 大学院理工学研究科 修士課程修了
日本電信電話株式会社 (現 NTT 株式会社) 入社

2017年 LOIS 若手研究者賞

2019年 株式会社 NTT ドコモ サービスイノベーション部 転籍

2023年 情報処理学会 コンピュータセキュリティ研究会
運営委員 (現在に至る)

日本電信電話株式会社 サービスイノベーション総合研究所
社会情報研究所 転籍

2024年 情報処理学会 第86回全国大会プログラム編成WG 委員

2025年 情報処理学会 業績賞

情報処理学会 第87回全国大会プログラム編成WG 委員

FIT2025 第24回情報科学技術フォーラム FIT2025 研究専門委員会担当委員
現職



寺田 雅之 (てらだ まさゆき)

株式会社 NTT ドコモ モバイルイノベーションテック部
社会予測技術開発担当 担当部長/セキュリティプリンシパル
(プロフィール)

1995年 神戸大学 大学院工学研究科 修士課程修了
日本電信電話株式会社 入社

2003年 株式会社 NTT ドコモ マルチメディア研究所 転籍

2008年 電気通信大学 電気通信研究科 博士後期課程修了
博士 (工学)

2009年 DICOMO2009 優秀論文賞

2014年 DICOMO2014 最優秀論文賞

2015年 情報処理学会論文誌 特選論文

2016年 情報処理学会 論文賞、情報処理学会 山下記念研究賞

2018年 DICOMO2018 優秀論文賞

2019年 NTT グループ セキュリティ資格認定 (上級)、セキュリティプリンシパル

2020年 MM 総研大賞 2020 最優秀賞、情報処理学会 業績賞

2021年 SCAT 表彰 会長賞

2022年 情報処理学会 フェロー認証、情報処理学会 理事

2023年 第11回技術経営・イノベーション大賞 総務大臣賞

2024年 科学技術分野の文部科学大臣表彰 科学技術賞、第69回前島密賞、

全国発明表彰 発明賞、CSEC 優秀研究賞、京都橘大学 教授 兼務、現職

2025年 情報処理学会 業績賞



◇会長賞

「水空合体ドローンとその水中測位に関する研究開発」

西谷 明彦¹、小島 淳一²、川田 亮一³

(1: 株式会社 KDDI 総合研究所、2: 株式会社 KDDI 総合研究所(旧)、

3: KDDI 株式会社)

業績:

我が国ではインフラの老朽化が大きな問題となっており、全国数十万基に及ぶ橋脚やダム、港湾岸壁関係の施設について早急な点検・保守が必要となっている他、今後の洋上風力発電においても点検の効率化・安全確保が重要となる。この問題を解決するために、これまでは船を出して船上より水中ドローンを操作し点検する方法が注目されてきたが、現場水域まで船を出すこと自体が人手と時間がかかるという問題があった。そこで受賞者は、遠隔からドローンを飛ばして現場水域に行かずとも水中の点検が可能な世界初のモバイル対応水空合体ドローンを提案し、その試作開発に成功した。本方式では自動飛行する空中ドローンが水中ドローンを抱えて飛び、目的水域に着水後に空中ドローンがモバイル通信を維持したまま通信ケーブルでつながった水中ドローンを分離・潜航させることにより、遠隔からの水中ドローンのリアルタイム管制を可能とした。水中ドローンの操作はモバイル回線経由で陸上拠点から実施し、両ドローンのカメラ映像および位置情報もモバイル回線経由により実時間で見ることができる。加えて、特に海中はGPSが届かないため音波による測位を行うが、受賞者らは水空合体ドローンに適した測位方式を独自に開発し、高精度な水中測位も可能とした。これにより点検のために船を出さずに済むため、時間短縮・人手不足解消や人が潜らずに点検可能となり、安全性向上にも寄与した。現在、水空合体ドローンによる橋脚等の港湾インフラ点検や停泊中船舶の船底点検、養殖設備等の水産設備点検等の様々なユースケースにおける実証実験を完遂し、商用開発を進めている。

西谷 明彦 (にしたに あきひこ)

株式会社 KDDI 総合研究所 光部門

フォトリサーチグループ コアリサーチャー
(プロフィール)

1990年 日本工学院 八王子専門学校 情報処理科卒業
株式会社オーエスアイ・プラス 入社

2004年 株式会社 KDDI ネットワーク&ソリューションズ 配属

2008年 KDDI 株式会社に統合
株式会社 KDDI 研究所

(後に株式会社 KDDI 総合研究所と改称) 配属

2019年 XPRIZE 財団 Shell Ocean Discovery XPRIZE
準優勝 (Team KUROSHIO)

2022年 第10回ロボット大賞 総務大臣賞

2024年 現職



小島 淳一（こじま じゅんいち）

東京大学 生産技術研究所 ソーントン研究室 シニア協力員
〈プロフィール〉

- 1979年 東京工業大学 工学部 電気電子工学科卒業
- 1981年 東京工業大学 大学院理工学研究科
電子物理工学専攻 修士課程修了
国際電信電話株式会社（現 KDDI 株式会社） 入社
- 1994年 Marine Technology Society ROV Committee
最優秀論文賞
- 1999年 株式会社 KDDI 研究所（後に株式会社 KDDI 総合研究所と改称）
海洋エンジニアリンググループ グループリーダー
- 2001年 海洋音響学会 業績賞
- 2009年 株式会社 KDDI 研究所 環境計測プロジェクト プロジェクトリーダー
- 2016年 文部科学省 科学技術分野の文部科学大臣表彰 科学技術賞（開発部門）
フジサンケイグループ 地球環境大賞 フジサンケイグループ賞
- 2019年 XPRIZE 財団 Shell Ocean Discovery XPRIZE
準優勝（Team KUROSHIO）
- 2021年 KDDI 退職、現職、株式会社 KDDI 総合研究所 招聘研究員（2024年3月まで）



川田 亮一（かわだ りょういち）

KDDI 株式会社 応用技術研究1部 コアスタッフ
〈プロフィール〉

- 1989年 東京大学 工学部 電気工学科卒業
- 1991年 東京大学 大学院工学系研究科 電子工学専修課程修了
国際電信電話株式会社（現 KDDI 株式会社） 入社
- 1995年 第21回放送文化基金賞（放送技術部門）
- 1998年 電子情報通信学会 学術奨励賞
- 2001年 株式会社 KDDI 研究所 主任研究員
映像情報メディア学会 技術振興賞開発賞、鈴木記念賞、研究奨励賞
- 2004年 東京大学 博士（工学）
日本 ITU 協会 国際活動奨励賞
- 2006年 KDDI 株式会社 技術戦略部 研究開発グループリーダー
- 2007年 株式会社 KDDI 研究所 アプリケーションプラットフォームグループリーダー
- 2010年 KDDI 株式会社 技術戦略部 サービスフロンティアグループリーダー
- 2013年 慶應義塾大学 SFC 研究所 上席所員、W3C フェロー
- 2016年 内閣府政策統括官（科学技術・イノベーション担当）付上席政策調査員
日本 ITU 協会 功績賞
- 2018年 株式会社 KDDI 総合研究所 フューチャーデザイン 2-3 グループリーダー
- 2022年 第10回ロボット大賞 総務大臣賞
- 2024年 現職、映像情報メディア学会 フェロー認定



◇会長賞

「光衛星間通信システム(LUCAS)の開発・運用」

山川 史郎¹、田中 剛彦²

(1: 宇宙航空研究開発機構、2: 日本電気株式会社)

業績:

地球観測衛星による観測データが災害状況把握や地殻変動、地球環境変化の観測や海洋状況把握など国民の安心・安全に直結する分野に応用され、増大する観測データの地上への伝送や観測の即時性向上が重要となっている。受賞者はこれらの課題を解決するために光衛星間通信システム(LUCAS)を開発し、2024年9月に先進レーダ衛星「だいち4号」との光衛星間通信実証を成功させた。LUCASは低軌道を周回する地球観測衛星と静止軌道に位置する光データ中継衛星の間を高速な光通信で中継を行い、通信可能時間やデータ伝送容量の大幅な増加を可能とするシステムであり、静止軌道－低軌道間の約4万kmにおける通信速度1.8Gbpsは欧州宇宙機関の開発システム(EDRS)と並び世界最速であり、加えて、光ファイバ通信と同じ波長の信号光を用いるなどEDRSよりも将来性に優れた光衛星間通信システムとなっている。また、LUCASを用いることで、地球観測衛星は地上局との直接通信に比べて通信可能時間とトータル伝送容量が大幅に増加するため、迅速性が要求される災害状況把握に必要な大量の観測データの取得が可能となり、我が国の災害対応能力の向上を実現した。このように技術的難易度が高い静止軌道－低軌道間の光通信の成功は、今後の低軌道衛星コンステレーション通信や民間主導の次世代デジタルプラットフォーム構想、月近傍－地球間通信、測位ミッションにおける光衛星間測距への応用等の幅広いミッションへの光通信技術適用に向けて新たな道筋を切り開いた。

山川 史郎 (やまかわ しろう)

国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構 第一宇宙技術部門
JDRS プロジェクトチーム プロジェクトマネージャ
〈プロフィール〉

1997年 慶應義塾大学 大学院理工学研究科

後期博士課程 単位取得退学

宇宙開発事業団 入社

技術研究本部 要素技術研究部 通信・電源研究室

1998年 慶應義塾大学 大学院理工学研究科 博士(工学)

2003年 宇宙航空研究開発機構 総合技術研究本部 プログラム推進部 副主任開発部員

2004年 外務省出向 在ウィーン国際機関日本政府代表部 専門調査員

2007年 宇宙航空研究開発機構 復職

宇宙利用推進本部 利用推進プログラム・システムズエンジニアリング室 主任開発員

2010年 宇宙利用ミッション本部 利用推進プログラム・システムズエンジニアリング室
衛星システム技術グループ 技術領域サブリーダー

2011年 同 技術領域リーダー

2015年 第一宇宙技術部門 JDRS プロジェクトチーム ミッションマネージャ

2021年 現職



田中 剛彦 (たなか たかひこ)

日本電気株式会社

エアロスペース・ナショナルセキュリティビジネスユニット

エアロスペース事業部門 スペースプロダクト統括部

プロフェッショナル

〈プロフィール〉

1987年 京都大学 大学院工学研究科 電子工学専攻 修士課程修了

日本電気株式会社 入社

宇宙ステーションシステム本部 システム技術部

1992年 日本電気株式会社 宇宙ステーションシステム本部 システム技術部 主任

1998年 日本電気株式会社 宇宙ステーションシステム本部 システム技術部 マネージャー

2001年 NEC 東芝スペースシステム株式会社 出向

2007年 出向復帰 日本電気株式会社 宇宙システム事業部 宇宙システム部 エキスパート

2008年 NASA Space Flight Awareness Honoree award (STS-124 mission)

2013年 日本電気株式会社 宇宙システム事業部 宇宙システム部 シニアエキスパート

2014年 日本電気株式会社 宇宙システム事業部 宇宙システム部長

2016年 日本電気株式会社 宇宙システム事業部 プロジェクト推進部長

光衛星間通信システム プロジェクトマネージャ (現在に至る)

ISO SC14 国際標準検討委員会/インタフェース検討分科会 主査

(22年から副主査)

2022年 日本電気株式会社 宇宙システム統括部 シニアプロフェッショナル

2024年 現職



◇会長賞

「光ファイバを用いた革新的センシング技術による社会インフラの安全・安心への貢献」

水野 洋輔¹、李 ひよん²、中村 健太郎³

(1: 横浜国立大学、2: 芝浦工業大学、3: 東京科学大学)

業績:

社会インフラが耐用年限を迎えつつある一方で、地震や豪雨等の自然災害は激しさを増しており、構造物の健全度を面的かつ即時に把握できるセンシング技術の整備が喫緊の課題となっている。受賞者は分布型光ファイバセンサの1つの方式であるブリルアン光相関領域反射計(BOCDR)の黎明期からその開発に貢献し、計測速度・空間分解能を飛躍的に引き上げた。本技術は連続光の可干渉性を高度に制御する新しい原理に基づくもので、初期試作段階において、従来の1mを超える空間分解能に対し当時世界最高の13mmを達成した。また、ブリルアン散乱スペクトルの周波数情報を時間情報へ直接変換する位相検波法を考案して動作速度を大幅に向上し、静的モニタリングに留まらず歪・温度・振動・衝撃のリアルタイム分布計測を世界で初めて可能にした。さらにBOCDRの原理をプラスチック光ファイバに適用して巨大歪や曲率変動の分布計測を実証し、それまで困難であった柔軟ロボットやウェアラブルデバイス等の領域にも応用範囲を広げた。また、光ファイバをコンクリートや複合材に埋め込んだ実験により本技術の実用性を実証した。近年ではBOCDRの原理を自由空間光へ拡張した相関領域ライダーを提案し、自動運転やスマートシティ分野への応用も期待されている。このように、空間分解能、動作速度、歪ダイナミックレンジという分布型光ファイバセンシングの三つの主要指標全てにおいて受賞者は世界記録を更新し、その適用範囲を拡大した。

水野 洋輔 (みずの ようすけ)

横浜国立大学 大学院工学研究院 知的構造の創成部門 准教授
(プロフィール)

2005年 東京大学 工学部 電子工学科卒業

2008年 先端技術大賞 フジテレビジョン賞

2010年 東京大学 大学院工学系研究科 電子工学専攻
博士課程修了 博士(工学)
東京工業大学 特別研究員

2011年 ドイツ連邦材料試験研究所(BAM) 客員研究員

2012年 東京工業大学 精密工学研究所 助教
安藤博記念学術奨励賞

2013年 エヌエフ基金 研究開発奨励賞、手島精一記念研究賞(中村健二郎賞)

2016年 東京工業大学 科学技術創成研究院 未来産業技術研究所 助教

2017年 光学論文賞、新化学技術研究奨励賞

2018年 船井学術賞、光設計奨励賞

2019年 テレコムシステム技術賞、未松賞、
Outstanding Paper Award, Light: Science & Applications

2020年 現職

2021年 文部科学大臣表彰(科学技術分野) 若手科学者賞

2022年 コニカミノルタ画像科学奨励賞(連携賞)



李 ひよん (い ひよん)

芝浦工業大学 工学部 情報通信工学科 准教授
(プロフィール)

2014年 国立慶北大学 機械工学部卒業

2017年 東京工業大学 総合理工学研究科
物理情報システム専攻 修士課程修了
POF2017 Best Student Paper Award、
MOC2017 Student Award

2018年 APOS2018 Student Paper Award、
光設計奨励賞、光ファイバ応用技術研究会 学生奨励賞

2019年 東京工業大学 工学院 電気電子系 博士課程修了 博士(工学)
芝浦工業大学 工学部 情報通信工学科 助教
エヌエフ基金 研究開発奨励賞

2021年 手島精一記念研究賞(博士論文賞)、ELEX Best Paper Award

2022年 現職
光ファイバ応用技術研究会 奨励賞
応用物理学会 女性研究者研究業績・人材育成賞(小舘香椎子賞)



中村 健太郎 (なかむら けんたろう)

東京科学大学 総合研究院 未来産業技術研究所 教授
新産業創成研究院 院長

(プロフィール)

1992年 東京工業大学 総合理工学研究科 電子システム専攻
博士課程修了 博士(工学)

東京工業大学 精密工学研究所 助手

1993年 東京工業大学 総合理工学研究科 講師

1995年 日本音響学会 栗屋潔学術奨励賞

1996年 東京工業大学 精密工学研究所 助教授

1998年 電子情報通信学会 論文賞

2006年 超音波エレクトロニクス 論文賞

2010年 東京工業大学 精密工学研究所 教授
日刊工業新聞 モノづくり連携大賞 特別賞

2011年 超音波エレクトロニクス 論文賞

2015年 光ファイバセンシング振興協会 理事長

2016年 東京工業大学 科学技術創成研究院 未来産業技術研究所 教授
日本音響学会 論文賞

2018年 光設計奨励賞

2022年 東京工業大学 科学技術創成研究院 未来産業技術研究所 所長

2024年 現職

2025年 東京都功労者表彰(技術振興功労)



◇優秀賞

「シーン適応型カメラの研究開発」

菊地 幸大、富岡 宏平、薄井 武順

(日本放送協会)

業績:

監視カメラの映像は災害発生時における地震や津波の状況を迅速かつ正確に伝えるための重要な情報源となるため、このような用途では広い視野を高画質で撮影できる性能がカメラに求められる。しかしながら広視野の映像には通常の映像に比べて、様々な動きや明るさを持つ被写体が同一画面内に混在するため、特定の被写体に合わせて画面全体の撮影条件を設定する従来のカメラでの撮影では、すべての被写体を同時に高画質で撮影することは困難であった。この課題に対処するため、受賞者は画面内の領域単位で適した条件の撮影を可能にする「シーン適応型カメラ」を開発した。このカメラの開発では、撮影中の映像をリアルタイムで解析し、動きの速い被写体が存在する領域には高いフレームレートでの撮影を、明るい被写体が存在する領域では短い露光時間での撮影を可能にするために、フレームレートや露光時間といった撮影条件を領域毎に割り当て可能な“エリア制御イメージセンサー”を新たに開発した。このセンサーは 4×4 画素で構成される領域毎に異なる4つの撮影モード(基本、高速、高輝度、低輝度)を設定できるため、本センサーを搭載したシーン適応型カメラにより領域毎に最適な撮影モードの割り当てが可能となり、同一画面内にある異なる動きや明るさの被写体を同時に高画質で撮影でき、画面全体の映像品質を飛躍的に向上させた。

菊地 幸大 (きくち こうだい)

日本放送協会 放送技術研究所 テレビ方式研究部
(プロフィール)

2009年 千葉大学 工学部 電子機械工学科卒業

2011年 千葉大学 大学院工学研究科

人工システム科学専攻 修士課程修了

日本放送協会 入局

2013年 日本放送協会 放送技術研究所 新機能デバイス部

2016年 現職

2024年 The Best of IET and IBC 2024



富岡 宏平 (とみおか こうへい)

日本放送協会 放送技術研究所 テレビ方式研究部
〈プロフィール〉

2011年 京都大学 工学部 物理工学科卒業

2013年 京都大学 大学院工学研究科

マイクロエンジニアリング専攻 修士課程修了

日本放送協会 入局

2016年 現職

2024年 映像情報メディア学会 鈴木記念奨励賞



薄井 武順 (うすい たけのぶ)

日本放送協会 放送技術研究所 テレビ方式研究部 副部長
〈プロフィール〉

2002年 東京工業大学 工学部 情報工学科卒業

2004年 東京工業大学 大学院理工学研究科 修士課程修了

日本放送協会 入局

2007年 日本放送協会 放送技術研究所 (材料・デバイス)

2016年 映像情報メディア学会 ディスプレイ研究会

幹事 (現在に至る)

2022年 電気通信大学 情報理工学研究科 基盤理工学専攻
博士課程修了 博士 (工学)

2024年 映像情報メディア学会 英語論文編集委員 副委員長 (現在に至る)

2025年 現職



◇優秀賞

「ろう・難聴者支援のための Web ベース PC 文字通訳システムの開発」

若月 大輔（筑波技術大学）

業績：

ろう・難聴者の多くは音声の聞き取りが困難なため、話の内容をリアルタイムで文字に変換し、パソコンやタブレットの画面に表示する「PC 文字通訳」という手法が存在する。PC 文字通訳により、ろう・難聴者は周囲の人々と同じタイミングで同じ情報を得ること（情報保障）が可能となるが、利用者に誤情報を伝えないように誤認識を減らす音声認識技術や、二人以上の通訳者が文を分担して入力する「連係入力」という技術も必要となる。受賞者は、PC 文字通訳で連係入力を可能にする従来の専用アプリで必要であったネットワーク設定やセキュリティ上の課題を解決するため、HTML5とJavaScriptによる Web アプリとして PC 文字通訳を実現できる captiOnline(キャプションライン)を開発した。このアプリでは、端末や OS を問わずブラウザで URL を開くだけで PC 文字通訳環境が整う他、盗聴の心配もなく、誰でも容易に利用可能である。さらに、支援者間で実時間の連係入力も可能で、より多様な環境で安全かつ容易に、より正確でスピーディに PC 文字通訳を提供できるようにした。また、音声認識による誤認識を素早く訂正する機能や、文字通訳と図表等の関連を明確にできるハイブリッド字幕機能等を備えることにより、利用者と支援者双方の利便性向上を実現した。このように、ろう・難聴者等の情報保障が必要な人々が安心して社会参加・参画できる環境を提供できるようにした。

若月 大輔（わかつき だいすけ）

筑波技術大学 産業技術学部 教授

〈プロフィール〉

1998年 新潟大学 工学部 情報工学科卒業

2000年 新潟大学 大学院自然科学研究科

情報・計算機工学専攻 博士前期課程修了

2002年 日本バーチャルリアリティ学会 第7回大会学術奨励賞

2003年 新潟大学 大学院自然科学研究科 情報理工学専攻

博士後期課程修了 博士（工学）

新潟大学 法学部 助手

2004年 新潟大学 人文社会・教育科学系 助手

2005年 筑波技術短期大学 聴覚部 助手

筑波技術大学 産業技術学部 助手

2007年 筑波技術大学 産業技術学部 助教

2011年 筑波技術大学 産業技術学部 准教授

ヒューマンインターフェースシンポジウム 2011 優秀プレゼンテーション賞

2018年 Emerald Publishing Limited, UK The 2018 Emerald Literati Awards

2019年 ICETC2019 Best Presentation Award

2021年 現職

